

## コスタリカ

### モンテベルデ自然保護地区

#### の自然散策

#### 乗松かつみ

首都サンホセから北西むかって、バスで目的地モンテベルデへパンアメリカンハイウエー（北の隣国ニカラグア―南の隣国パナマ）をひた走る。途中、交通事故を目撃。隣の宮さんと「こわいネ」と顔を見合わせて、シートベルトを締めた。一時間余で太平洋が見えてくる。サンホセ市は中央盆地の標高八百〇千メートルに位置するため過ごしやすかったが、トイレ休憩でバスを降りたらムーと暑さが迫ってきた。太平洋側は熱帯乾燥林だ。カリブ海側（大西洋側）は熱帯雨林。さらにバスはハイウエーから舗装のない山道にわけいり、出発から四時間余でモンテベルデに到着。そこ

はテイララン火山脈の標高八百〇千三百メートルの山中にあり、世界でも珍しい“熱帯雲霧林”だ。ほとんど一年中霧に覆われた熱帯の密林で、分水嶺にもなっている。

”熱帯雲霧林”というのは、二つの海に挟まれ標高千メートル以上の高地に、二つの海からの水分が雲や霧を発生させてできる熱帯林とのこと。そこには多様で独特の生物が生息する。

ホテルでの昼食後、「スカイトラム」といわれるゴンドラ（六人乗り）で空中散策。ゴンドラはゆっくりゆっくり登っていく、最高四十九メートルの高さから雲霧林のおおよその様子を把握。西側には先ほど通ってきた太平洋が見えた。気象条件が良ければ東側にはカリブ海（大西洋）も見られるとか。スワロー・テイル・カイトと呼ばれる大型のつばめに似た鳥が盛んに飛んでいた。

ゴンドラを降りてトレイル（動物や人が通つてできた自然道）をしばらく歩くと木々の間に何本もの太いワイヤーに吊るされた、橋が現れた。今日のハイライ

ト「スカイウォーク」の始まりだ。ジャングルの地表から三十〜四十メートルの高さに架けられた吊り橋を渡りながら、動植物を観察する施設だ。地上からは見ることのできない樹上の様子を、鳥の目の高さで観察できる。特に見どころは着生植物である。樹木の幹や枝にコケ類、シダ類、ツタや蘭など様々な植物が着生して、共に生きている。寄生植物とは違って、母体である木から養分をとって枯らすことはないそうさ。それぞれが独自の方法で養分を確保して、大気中の水分を吸収して成長する。植物だけでなく樹上で暮らす「なき猿」も見ることができた。吊り橋は歩く部分(足元)がネット状になっていて、深い密林が足元に拡がっている。地表はほとんど見えない。時折ワイヤーが揺れて高所恐怖症でなくても足がすくむ。密林の樹間にくつもの吊り橋を張り巡らしている。動植物や環境にやさしい方法で、できるだけ生態系を壊さないように配慮したシステムづくりに感動！エコツーリズム発祥の国といわれる所以だ。

コスタリカは北海道の六割位(九州と四国を合わせ

たくらいの面積)の面積の国土に五十万種の生物が生息。これは地球上の全生物種の五パーセントに当たるそうさ。単位面積あたりの動植物種がもつとも多いといわれる。が多くが絶滅の危機に瀕しているそうさ。

コスタリカでは他の中南米の国々同様一九七〇年までに森林伐採が行われて多くの熱帯林が姿を消して行った。一九七九年、自然保護の法律が次々に作られて環境保護国を国是として掲げ、自然環境の保護を積極的に推進している。国土の四分の一が国立公園や自然保護区として国に保護されている中で、自然保護の原点であり、もつとも有名なのがモンテペルデだ。

ここはもともとアメリカのクエーカー教徒が入植し、開拓した土地だったそうさ。一九四八年に勃発した朝鮮戦争で徴兵を拒否したクエーカー教徒が刑務所に拘束されるといふ事件がおきた。そこで一部の教徒が、戦争を否定して生きられる国を捜し、たどりついたのがコスタリカ。すでに当時コスタリカは軍隊を廃止。一九五一年信徒四四人がモンテペルデ地区を購入。うっそうとした密林を切り拓き、自給自足の生活

の基礎を築いた。想像を絶する苦労があったことだろう。

彼らは三万ヘクタールの土地の標高千メートル以上の土地の密林五百五十ヘクタールを開拓せずに残した。それが現在の保護区の中核となり、一九七二年にコスタリカ政府に自然保護区として承認されたという歴史をもつ。

平和、人権尊重、環境保護のコスタリカらしいエピソードに感慨をあらたにした次第だ。